

Japanese A: literature – Higher level – Paper 1
Japonais A : littérature – Niveau supérieur – Épreuve 1
Japonés A: literatura – Nivel superior – Prueba 1

Friday 8 May 2015 (afternoon)

Vendredi 8 mai 2015 (après-midi)

Viernes 8 de mayo de 2015 (tarde)

2 hours / 2 heures / 2 horas

Instructions to candidates

- Do not open this examination paper until instructed to do so.
- Write a literary commentary on one passage only.
- The maximum mark for this examination paper is **[20 marks]**.

Instructions destinées aux candidats

- N'ouvrez pas cette épreuve avant d'y être autorisé(e).
- Rédigez un commentaire littéraire sur un seul des passages.
- Le nombre maximum de points pour cette épreuve d'examen est de **[20 points]**.

Instrucciones para los alumnos

- No abra esta prueba hasta que se lo autoricen.
- Escriba un comentario literario sobre un solo pasaje.
- La puntuación máxima para esta prueba de examen es **[20 puntos]**.

次の文章と詩のうちどちらか**一つ**を選んでコメントリー（解説文）を書きなさい。

1.

知性

かつて、群馬県上野村の私の家に、夜になると遊びにくる一匹の野ネズミがいた。自分で開けた壁の穴から暗くなると入ってくる。いろいろな遊びを考察しながら過ごし、朝になると山に帰る生活をしていた。柱をよじのぼり、私の肩に跳び蹴りをしたことがある。私の煙草たばこを持って行って、吸い方を考えていたこともある。残念ながら火をつけることがわからなかったので、目的は達せなかったのだけれど。

何かをたくらんでいるときの表情は面白かった。部屋の隅で、思索しているのである。

- 5 それを「知性」と呼ぶなら、私は、すべての生き物たちの「知性」のレベルは変わらないと思っている。自分に必要なことはすべて知っているし、新しいたくらみも考案する。人間との違いがあるとすれば、お金がほしいとか、持ち物や財産をふやしたいといった、自然界からはみだした過剰な欲望を持っていないことと、彼らの「知性」は「知性」だけで独立していなくて、身体の動きと一体になっていることだけだ。

- 10 近代的な思想は、人間が持っている「知性」を絶対視した。たとえば、近代哲学の父とも呼ばれたデカルトが、〈われ思う、ゆえにわれあり。〉と述べたとき、それは、考えている私は確かに存在するという意味であり、私の本質は考えている私に、つまり私の本質は知性にあるということであった。そして、この知性こそが真理を発見していく力だと考えられた。デカルトは自然科学の信奉者でもあったけれど、科学がこの世界の真理を発見し、それらの学問をつくりだしていく力が知性であるという、知性に対する全幅の信頼がデカルトにはあった。

- 15 とすると、ここで述べられている知性は、やはり人間だけの所有物だ。なぜなら、上野村の私の家を訪れた野ネズミは、いろいろなことを考え、たくらみを張りめぐらしてはいたけれど、自然科学を深めて真理を発見しようなどとは思っていない。自分の生きる世界こそが真理の世界なのであり、真理は発見する対象ではない。

ところで、このデカルト的な思考は、仕事のとらえ方にも影響を与えるようになる。

25 近代的な生産がはじまると人間たちの仕事は、生産システムをつくる仕事と、そのシステムのもとで働く仕事に分かれる傾向を示した。自然科学が発見したものは、生産の場所では生産技術を創造する人々と、その技術に従って作業をする人々とに分かれていく。経営システムをつくる人と、その経営システムのもとで働く人。そんな分化が進行した。

30 近代以前の労働はそういうものではなかった。職人は設計者でもあり、作業をする人でもあった。商人は、自分の商いのあり方を自分で決めながら、日々の仕事をしていて、仕事のすべての部分が、労働のなかに包みこまれていたのである。

35 ところが、近代的な生産では、仕事の分化がはじまる。そしてこの動きと、人間の知性を絶対視する思想が結びついた。人間の労働が、知性を働かせた「知的労働」と「肉体労働」とに分けてとらえられるようになったのである。「知的労働」が人間的な労働であり、「肉体労働」は肉体の消耗にすぎないという考えが、こうして定着していく。

40 私はこのような考え方が、人間の労働を痩せ細らせていったのではないかと考えている。考えることと身体を動かすこととは、一つの労働の二つの側面にすぎなかったのに、この二つの側面が切り離されてしまった。たとえば、つくりながら考え、考えながらつくる労働が、考える人とつくる人に分かれてしまったのである。

45 それは、第一に、「肉体労働」をつまらないものにしてしまった。決められた生産システムのもとで同じ作業を繰り返すだけなら、この仕事が面白いはずはない。とともに、「知的労働」も創造性のないものに変えてしまった。もしも「知的労働」が創造的なものであるとするなら、それは仕事の全過程にかかわりながら、考え、工夫をし、研究や開発をするときに生まれてくる。実際、仕事の全過程にかかわることができなくなったとき、「知的労働」は次第に、マニュアルに従って仕事をする方向に向かった。

近代以降、経済は飛躍的に拡大したが、人間の仕事そのものはこうして痩せ細っていった。

(内山節 『戦争という仕事』二〇〇六年)

朝の鏡

- 朝の水が一滴、ほそい剃刀の刃のうえに光って、落ちる——それが一生というものか。不思議だ。
- なぜ、ぼくは生きていられるのか。曇りの日の海を一日中、見つめているような眼をして、人生の半ばを過ぎた。
- 「一個の死体となること、それは常に生けるイマージュであるべきだ。ひどい死にざまを勘定に入れて、迫りくる時を待ちかまえていること」
- かつて、それがぼくの慰めであった。おお、なんとウエファースを噛むような考え！おごりと空しさ！ぼくの小帝国はほろびた。だが、だれもぼくを罰しはしなかった。まったくぼくがまちがっていたのに。アフリカのすさまじい景色が、強い光りのなかに白々と、ひろがっていた。そして
- まだ、同じながめを窓に見る。（おはよう女よ、くちなしの匂いよ）積極的な人生観もシガーの灰のように無力だ。おはよう臨終の悪臭よ、よく働く陽気な男たちよ。ぼくは歯をみがき、ていねいに石鹸で手を洗い、鏡をのぞきこむ。
- 25 朝の水が一滴、ほそい剃刀の刃のうえに光って、落ちる——それが一生というものか。残酷だ。
- なぜ、ぼくは生きていられるのか。嵐の海を一日中、見つめているような眼をして、人生の半ばを過ぎた。
- 30